

美術館 夏休み自由研究プロジェクト

アルカディア文化館（近藤浩一路記念南部町立美術館）を紹介します！

山梨県の最南端、南部町は静岡県との県境、気候は静岡県に近いことから山梨県で最も温暖な地域です。産業はお茶や竹の子が特産で県外からたくさんの方が訪れます。そんな緑豊かな南部町には南部町出身の水墨画家・近藤浩一路の記念美術館（アルカディア文化館）があり、たくさんの絵画が所蔵されています。また、美術館の周りは、アルカディア南部総合公園という名称でスポーツ施設や野球場、テニスコートがあります。文化館1階は図書館になっているので、絵を鑑賞したり、本を読んだりスポーツをしたり、とても素晴らしい環境の中で一日過ごすことができます。



↑ 展示室はこんな感じだよ！

← こちらが建物です。



①【近藤浩一路ってどんな人？】

明治17年、南部町に生まれました。その後、静岡県に移り住み、韮山中学校（現・韮山高校）を卒業すると東京の美術学校（現・東京芸術大学）に入学し、洋画（油絵）の勉強をしました。大学を卒業すると新聞記者として漫画も描き漫画家として有名になった時代もありましたが、徐々に日本画（水墨画）への志が強くなり代表作となった「鶺鴒六題」（1923）の発表後は水墨画家として精力的に作品を発表していきました。いつの時代も描くことへの信念が強く時代ごとに変化していく近藤浩一路の水墨画は多くの人々に愛され、今も大切に伝え続けられています。



近藤浩一路画伯



なるほど！

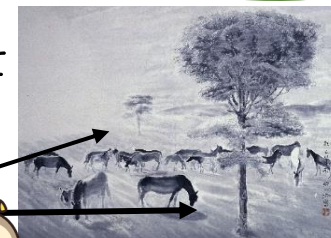
②【水墨画！とは】

水墨画（すいぼくが）とは、唐代（中国の王朝）に成立したとされる墨で表現される墨絵（すみえ）の様式です。墨線だけでなく、墨を面的に使用し、ぼかしや濃淡・明暗を表す絵画です。墨に五彩あり・・・とは中国の古き言葉。墨は黒一色ではないのです。

③【浩一路の水墨画の特徴】

浩一路の作品はいつも光と影が重要な割合をはたしています。洋画（油絵）で学んだことを水墨画の中に取り入れ自分だけの特色のある世界を確立しました。浩一路の水墨画って写真みたいにも見えませんか？

・太陽の光 ・馬や木の影



・タイトル：放牧



④【浩一路は絵を描く道具にこだわりをもっていた】

大正時代、中国を旅をした浩一路は伝統的な中国の水墨画にふれ、様々な名画に感動し水墨画への情熱が高まりました。また、同時に道具への関心も深まり墨・硯・紙（和紙）・筆など中国の高価な道具を使用することでより素晴らしい作品が誕生することも実感しました。

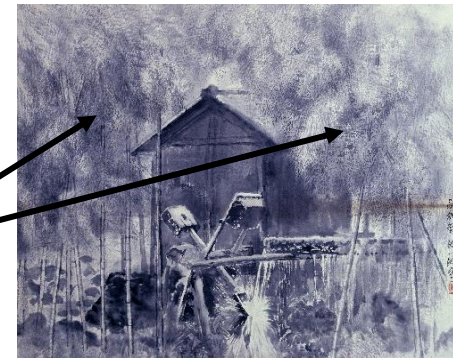


南部町立美術館には画伯が使用した中国の硯があります。近藤家の家宝とされていたんだよ。

⑤【浩一路作品の中でよく使われている水墨画の技法について】

・もみがみ法

和紙を手で揉んでシワを作り、描く時になでるように墨をのせていくと、へこんでいる部分は白くぬけるようになります。とても技術がいる技法です。風景画の中でよく使う技法なので美術館に来た時に作品をみてさがしてね！
作品をみていると水の流れる音が聞こえてきそうですよ。



作品のタイトル「竹林水車」ちくりんすいしゃ
水車小屋の周りの竹林をこの技法で描いています。

水墨画に挑戦してみよう！



体験だよ！



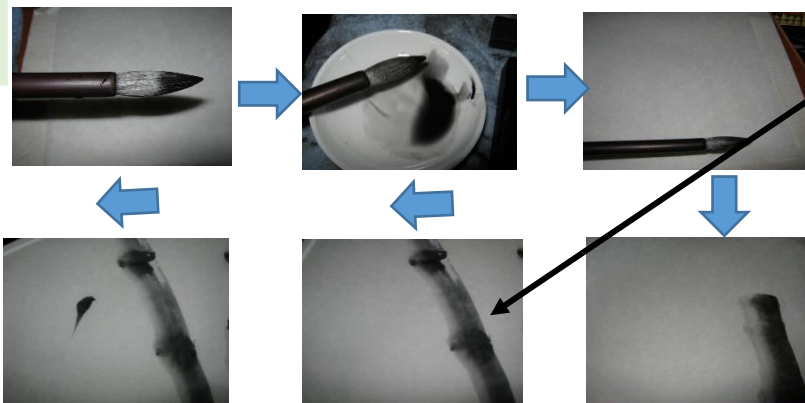
(用具と材料)

お習字のセットがあれば大丈夫。
こんな感じにね！ ⇒

- ① すずり ② すみ ③ ふで
- ④ ぶんちん ⑤ 下敷き ⑥ 和紙
- ⑦ 水さし (ふで洗い) ⑧ 小皿 ⑨ 布



竹を描いてみよう！
ステキな1枚になるよ。



では、スタート！ 誰でも簡単に水墨画を楽しめます。

- ① まず筆の先から半分くらいに濃い墨をつけます。
- ② 残った筆の部分に絵皿で薄めた墨をかるくつけます。そうすることで筆に濃淡（グラデーション）が出ます。
- ③ 筆を横に倒して、上へ描きます。
この時、しっかり紙をおさえないと筆がまっすぐ進まず、曲がってしまうので注意。なるべく、さっと書きましょう。ゆっくり動かすと墨が滲みすぎてしまいます。
- ④ 竹の節の所で1回止めます。
この時ピタッと筆を止めるようにすると良いです。
(2番目の幹も同じように描きます。)
- ⑤ かすれが出ると尚良いです。水分を多く含ませすぎなければ自然に出ると思います。勢い良く筆を動かすのがコツです。
幹を書き終わったら、節の部分に線を入れます。
- ⑥ 次に、竹の葉です。筆先を整えて、筆を少し立てます。そして素早く抜き上げる。同じ葉でも、色の濃い葉と薄い葉を入れると奥行きが出て竹らしくなります。
- ⑦ 葉っぱを書く時は、枝の位置を想定して書くと良いですね。



だいじょうぶ！遊びながら楽しんでみてください。
意外とカッコよく描けちゃうよ！